新潟県小学校
校長会報
題字…今山政三郎氏

発行所
新潟県小学校長会広報部
新潟市中央区幸西3－3－1
じょいあす新潟会館２階
ＴＥＬ　025－290－2231
ＦＡＸ　025－245－6060
E-mail：nksgko@niigata-inet.or.jp
印刷所　株式会社 文久堂
カット…細井　一貞
（上越　直江津南小）

ソサエティ5.0とベーシックな力

新潟県小学校長会　副会長　熊倉　達也

ソサエティ5.0。「狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く、新たな社会を指すものであり、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより実現する」とされている。

新学習指導要領の導入に際しても議論されたと聞くし、第三期教育振興基本計画にも「超スマート社会（Society 5.0）」として出ている、最近飛び交っている言葉の一つである。

このことに関して、全連小の研修会における文部科学省行政説明を聞いて心に残ったフレーズがある。「ソサエティ5.0となっても、一部のエリートではなく、ベーシックな力を持った市民の層の厚みが最も大事である。」

ＡＩ（人工知能）が行う学習や判断の枠組みは、意図を持った人間が作るプログラムによって決まる。また、ＡＩが導いた判断を実行するかどうか決定するのも人間である。従って、人間がＡＩに使われるのではなく、ＡＩを作り、使いこなすためには、文章や情報を正確に理解し、自分の頭で考え、判断し、表現するといった、極めて「ベーシックな力」が不可欠なのである。

産業革命の頃のイギリスで、工場労働者を家の窓を叩いて起こす「ノッカー・アップ（目覚まし屋）」という職業があったという。ＡＩが進化すると人間の職業が奪われるのではないかと心配する人もいるが、技術の進歩で新たな職業が生まれたり、これまでの職業であっても仕事の中身が変わったりするのは至極当然のことである。

新たな時代に期待しつつ、そこに生きる子どもたちに「ベーシックな力」をきちんと付けることを意識して実践を進めたい。自立の基礎を培うことが、初等教育に携わる我々に課せられた使命である。（長岡　阪之上小学校）

平成三十年度　第一回　県小評議員会（報告）

日時　六月二十一日（木）十四時～十六時十五分
会場　上越市「高陽荘」

一　開会の挨拶

県内で発生した四件の児童の死亡事件・事故に際し、改めて命を守ることの重要性と責任を感じた。教職員とともに安全確保を愚直に行うことで、次の世代の管理職に受け継ぐことが大事。本会での慎重審議をお願いする。

二　議長選出

三　報　告

・会務報告
・全連小・関ブロ関係
・県小代議員会　魚沼・小千谷大会関係

四　協　議

㈠　各部の事業計画について

(1)　対策部
「各市町村における教育関連予算等の拡充」に焦点を当て、関係機関等の協力を得ながら組織的に調査研究を行う。

(2)　福利部
教職員の給与・処遇や退職後の就職・再任用、及び福利厚生を巡る情勢に対処し、また、新潟市への包括的権限移譲に伴う課題に対応するため、県中校長会や全連小、退職校長会等と連携する。情報の収集や調査研究を行い、関係機関・団体に要望する等して教職員の福利の向上に寄与する。

(3)　研修部
新学習指導要領への対応を喫緊の課題と捉え地域の信頼を得る創造的な学校経営を展開するため、研究集会を開催して研修を深める。
○小学校長会研究集会長岡・三島大会　十月十六日（火）
・外国語の実施に向けた実践の情報交換と協議

(4)　広報部
会員の連携と学校経営の改善充実に資するよう、活動や当面の課題に関する情報を提供する。

㈡　全県研究集会長岡・三島大会

㈢　三十年度全連小北海道大会、三十一年度関ブロ千葉大会

㈣　平成三十年度「要望書」

五　連　絡

・日本教育会新潟県支部総会・研修会　七月七日（土）
・次年度代議員会三十一年五月八日

六　閉会の挨拶

想う

特別寄稿

教育雑感

高田世界館　支配人
上野迪音

現存する日本最古級の映画館「高田世界館」。明治44年に建てられ、高田の街が陸軍の入城によって近代化していった時代の名残をとどめる洋風建築である。建物の老朽化による取り壊しの危機を乗り越え、現在は市民が中心となって立ち上げたNPOによって維持・運営されている。私はそこで日々の営業を取り仕切っている。

最近では新聞・テレビなどメディアに取り上げられることも多くなってきたが、そこでは映画館のこともさることながら、高田の街の魅力やまちづくりについてしゃべる機会も増えてきたように思う。また、課外学習の授業で小中学生を受け入れたり、キャリア教育で学生の前で講話をしたりもする。この文章では、そうした経験を踏まえた上で、教育についての話題や観点を少しばかり提供したいと思う。

（街への誇りについて）

小学校に招かれて話をした時のことである。これから卒業していく六年生に向けて「自分たちの故郷について考える」というテーマで講話をした。話の中で、テレビに取り上げられた実際の映像を見せるなどして、高田の街が全国からこれだけ注目を集めているのだということをしきりに強調した。

児童一同、（彼らにとっての）知られざる事実を前に、かなり盛り上がっていた。児童からの事後アンケートからも興奮が伝わってきた。逆に、こんなにも自分の住む地域に自信を持っていないものかと思ったものであった。

もちろん、街にはいい部分もあれば悪い部分もある。だが、この時期の児童に対しては、まずは自分たちの街を褒めることからスタートしてもいいように思う。地方都市に住む私たちにとってはなおさらだ。地元に対して卑屈にならず、前向きな視点で捉えられるようにしなければならない。生きていく上での基盤となるような自信を持たせること。それが教育の大きな役割ではないだろうか。

かくいう私も、自宅が古い建物だということで小さい頃から強いコンプレックスを持っていた。友人を自宅に招くのも恥ずかしく思っていた。しかしその後、教育を経て、その自宅が高田の街の歴史や文化に根ざしたものであると知った時には、まさに目から鱗の状態だった。自分が恥と思っていたものを正面から見つめることができたことで、コンプレックスは消滅した。そこから、自己肯定感と自信が生まれた。なんと長きにわたって苛まれてきたことか。現在の私のまちづくりの原動力はここにある。

（本音を引き出すこと）

さて、ゲスト講師として学校に呼ばれることの多い私だが、子どもの前に立つ上ではなるべく「得体の知れない人間」たることを心掛けている。それは、素っ頓狂な奇人を演じる、ということではなく、さも真面目そうに振る舞うことをやめる、くらいのものだ。子ども相手なので社交辞令も言わないし、ゲストであることをいいことに好き放題言っている。

私はスーツを着るような習慣はない。そこを取り繕うところから「距離」が生まれると考えるから、特別の用事がない限りは着用しない。人間と人間同士がぶつからなければ、有意なものは生まれない。普段着の人間が出てくる、なんだか学校の先生とは様子が違うようだ、話し方も変だぞ？？　というふうに子どもに思わせたらまずは成功だ。

話す内容も無駄なことは言わない。また、どんどん会場の子どもの中に入って行ってマイクを向けたりする。こちらが率直に語っていくうちに、やがて子どもの方からも自分の言葉を繰り出してくるようになる。お互いが建前を保っていては、本音は出てこないのである。そのためにも、こちらから砕けていく必要がある。

「なかなかいないタイプの大人なので、子どもたちもすごく刺激を受けたと思います」という、褒めているのか皮肉なのか分からないことを学校の教員から言われたことがあるが、要は、私がやっているのは、多様な「大人」の類型を率先して提示するということなのである。これは、ある種のパフォーマンスでもある。私の存在を通じて、何か自由さを感じたり、何か行動を移す際の後押しになったりしたら、それは嬉しいことである。

子ども、特に思春期の彼らは何かにつけてシャイだ。自分もそうだったし、それは仕方ないことかもしれない。ただ、それがずっと続けば問題だ。誰も本音を言わなければどんどん社会は窮屈になってくる。前例は踏襲され続け、コミュニケーションは停滞し、思考は停止する。

私が突き崩したいのはそうしたことである。揺さぶりを掛け、本音を引き出す。そして連帯の可能性を模索する。これは、私のまちづくり活動の全般的なスタンスである。その上で「映画」あるいはソフトパワーというのは非常に重要だ。

紙面が尽きたので、この続きは現地でご確認されたい。

高田世界館

郷土風土記

金の道

「入梅晴れや　佐渡のお金が　通るとて」

北国街道信濃柏原宿を、江戸城に向けて通る金銀輸送の長い列があった。故郷柏原で、この行列を見た一茶が詠んだ句である。佐渡で採掘された金銀が、各地を通って江戸まで運ばれた。

一　相川から小木へ

相川金銀山が開発されたという慶長元（一五九六）年頃の佐渡の陣屋は、まだ沢根の鶴子銀山に置かれていた。相川金銀山で掘り起こされた金銀は、上相川の番所から茶屋平を経て陣屋に向かう上相川道を通り、陣屋から沢根港に運ばれ船に積まれていたと考えられている。以前勤務した学校の遠足でこの道を歩いた。人が歩いても急で狭い坂道もあった。重い荷物を積んだ馬が通るには、かなり厳しい道中だったと想像できる。

慶長九（一六〇四）年、前年に家康から佐渡奉行を命ぜられた大久保石見守長安が、鉱山の中心となった相川に陣屋を移した。それまで相川は十四、五軒しかない農村であったという。しかし、陣屋を造り、町を整備した結果、後に五万人もの人が住む町へと発展する。「佐渡年代記」の寛永六（一六二九）年の頃に「この年中山街道ができ、沢根より相川下戸へ下る」という記事が見える。佐渡奉行所（佐渡相川）の御金蔵から運び出される金銀荷（小判や砂金を含む）は、十貫目入りの木箱に入れて封印し、厳重に上包みされて中山峠を越え河原田、真野新町、西三川を通って三十六キロ離れた南端の小木港まで運ばれた。また、江戸中期には、相川から海路で小木に運ばれるようになった。

二　葵の船に乗って

小木港から対岸の出雲崎港までは、海上七十二キロ。芭蕉の「銀河の序」に「越後の出雲崎という処より、佐渡島まで海上十八里とかや」と書いてある海路を逆にたどるのである。

海峡を渡る官船は御座船とも呼ばれる奉行船との兼用である。船の周りに幔幕が張られ、白地に紺色の葵の御紋の幟が舳先に、また船尾には紅の吹き流しを立てた。

ホラ貝を合図に出港して「幸若節」や「高砂」などのにぎやかな祝い唄が唄われる。海難で万一沈没したときのことも考えて、箱の一つ一つに長さ三百尋の浮き綱を付けて渡海させたこともある。五時間あまりの航海で、出雲崎の名主や問屋衆が数隻の引き船を従えて沖合四キロまで出迎えるのが通例であった。

三　出雲崎から江戸へ

出雲崎から江戸までの道程はおよそ九十二里（三二八キロ。江戸時代の日記による。三十六町一里の計算）ある。道中は長丁場になるので、出雲崎では二泊した。それからの泊まりは、原則として、鉢崎、高田（新潟県）、野尻、屋代、小諸（長野県）、坂本、高崎（群馬県）、熊谷、浦和（埼玉県）、板橋（東京都）となる。わらじばきで、人馬の長い行列を従えての難行軍であった。それでも、一日三十七キロほどと、わりと速かった。三国峠を越える三国街道もあったが、山岳地帯が多く警護も困難なため、高田大地震のときに一度使われただけだった。

沿道には、直轄地が少なく、藩領が多い。各大名も警護にあたる。また、通過する宿場では近傍の村々に日を決めて人や馬の夫役を割り当てていた。馬の背中に「御用」の札を立て、将軍の御朱印状や老中御証文を護送の役人が持っていて、人馬は皆無賃の継立となる。幕府の台所を支える大切なお金なので、金銀荷輸送のときだけに与えられた特権だった。沿道の人たちの苦労は並大抵ではない。

金の道

地役人須田富守の「江戸道中日記」によると、享保七（一七二二）年は、銀七百二貫目を七十箱に詰め、馬三十七頭で出立した。越後の高田では、手前の鉢崎まで足軽十五人が迎えに来て、殿様からの御祝儀として、大鯛二枚と酒樽一つが宿に届いた。

板橋では、明日は江戸入りなので、菰の上包みを外して箱の荷造りをきれいにし、家来たちも髪や月代を剃るなどして身支度を整えた。

佐渡では、佐渡金銀山について学ぶ。当校でも、新穂銀山を導入とし、佐渡金銀山について学び、「佐渡のよさに気付き、課題解決のために実践する子ども」の育成を目指している。

最後に佐渡金銀山の世界遺産登録を祈念して結びとする。

郡市だより

教育は人をつくり、地域をつくる崇高な営み

胎内市小学校長会

胎内市は、飯豊山系に源を発する胎内川によりつくられた扇状地で、豊かな自然と文化を育んできたところである。胎内市小学校長会は五名の会員で構成される小規模な組織ではあるが、それ故に機動力があり、俊敏に対応できるよさがあると実感する。市の教育理念「教育は人をつくり、地域をつくる崇高な営み」の実現に向け、連携を密にした取組をしている。

一　活動の重点と組織

今年度は「学校課題への対応」「学校経営者としての資質・能力の向上」「コミュニティ・スクールの推進」等を重点に掲げ、活動を推進している。「定例校長会」、対策部・福利部・研修部・広報部の四つの「専門部会」、市教育研究会の事業を推進する「市教研推進委員会」の三つの組織を設け、重点の達成を目指している。

二　活動の推進

㈠　学校課題への対応

学力向上、生徒指導等は最重要課題である。昨年度は「主体的・対話的で深い学び」をテーマにした研修を行った。今年度は教育的ニーズを必要とする子どもへの対応をテーマにした研修を行う。校長としてどうリーダーシップを発揮し、学校課題に対応するのか考える。緊急性、重要性のあるテーマを設定し、学校経営者としての資質・能力の向上を図っている。

㈡　情報交換

「定例校長会」では、学校管理、子どもへの対応、関係機関との連携など、多岐に渡り情報交換している。連携を密に図ることで、情報を共有し、確かな取組へとつなげている。

㈢　教育懇談会

関係機関と連携し、新春教育懇談会を開催している。市長や市議、教育委員を迎え、胎内市の子どもについて熱く語り合う。学校評価やコミュニティ・スクールについての取組を発表し、その後、協議内容を絞ってグループ討議を行う。事例に学び、自校の取組を見直すよい機会となっている。

ふるさとを誇りに思い、未来を切り拓くたくましい子どもの実現に向け、胎内市小学校長会はこれからも連携を密にして力強く歩み続ける。

学校紹介

小中隣接の環境を生かした教育活動の推進

十日町市立下条小学校

十日町市立下条小学校は、十日町市の北端に位置し、全校児童一六二人、八学級の学校である。創立は明治七年、本年度で一四四年を数える。「なかよく　かしこく　たくましく」の教育目標実現のため「瞳きらきら　にこにこ笑顔」をスローガンにして知・徳・体のバランスのとれた成長を目指して教育活動を進めている。

一　校舎改築に込められた地域の願い

平成二十一年度、校舎の老朽化に伴う校舎改築の計画が持ち上がった。同時に、平成二十三年度から十日町市が取り組む小中一貫教育のモデル中学校区となることが明らかになった。これを機に、地元に「下条の教育を考える会」が設立された。この組織が中核となり、校舎改築が進められ、平成二十五年十二月に新校舎が竣工、隣の下条中学校とは廊下一本でつながる校舎となった。「未来にはばたく　下条っ子のために」という地域の願いの込められた教育環境が整った。そして記念事業として小中一貫の歌「ヒカリ　～未来に向かって～」が作り上げられ、小中合同のイベントや文化祭などで歌いつがれている。

二　小中交流活動の推進

下条小学校では、以前から縦割り班「若葉班」活動に力を入れてきた。そして現在は、校舎環境を生かし、小中合同の「若葉班」を編制し、交流活動を推進している。

五月には、小中交流活動のはじめの集いを行い、自己紹介や簡単なゲームなどをして顔合わせを行う。その後、小中ペア学年を決めてそれぞれ年間二回ずつの交流会をもつ。そして、十一月にはまとめとして報告会を行い、活動を共有している。

この他にも小中合同挨拶運動をはじめ、小学校運動会と中学校体育祭では小中合同種目を実施して交流を深めている。

このように、小中学校が隣接した利点を生かした教育活動を展開し、小中一貫教育に全力を挙げて取り組んでいる。

小中交流活動の一場面